

2020/5/2

(Final mission 「最期の任務」)



これはとても感傷的なお話です。

しかし、百年に一度の疫病禍の時節には、そうなるのも仕方ない気も致します。以前、お店に向かう途中、「メートル進むのに一分以上もかかる老犬を連れた、体格がよく顔には品格を感じるご老人とよくすれ違い、挨拶をするようになりました。

「旦那さん、いつも大変ですね」

「いやいや、自分よりこいつの方が」

そんな会話です。

しかし、ここにか月ほど、その姿を見かけなくなりました。

こちらもいろいろありましたので「そういえば、なんとなく見ないな」くらいで済ませていました。ほとんど忘れていたと言ってもいいでしょう。

それが、今日突然、

「わんこは連れていないが、あのご老人かな？」

という人とすれ違ったので、他の人同様ウィルスを防ぐためのマスクをしていたせいもあって「間違いかもしれないな」とは思いつつ、声を掛けました。

「いつも、わんこを連れていらっしやる方ではありませんか？」

するとそのご老人は、足を止めてマスクを外しながら

「はい。そうです」

とおっしゃったので

「わんちゃんは、今日はいないんですか？」

と尋ねると

「亡くなりました。一月に」

とにこやかながら寂しそうな顔でおっしゃいました。

「そうですか。かわいそうに。旦那さんは元気でいてくださいね。お力をお落としでしょうけど」

ご老人は薄い笑いを浮かべました。

「ありがとう」

しかしそのマスクを外した顔は、下半分が白い無精ひげで覆われていて、その力の落とし

ようがはっきり表れていました。いつもはきちんと髭を剃っておられたからです。

自分は、実はすれ違うたびに、あのわんことの散歩がこのご老人の生きが이었다ような気がしていました。というより最後の任務。Last mission。

「わしがいなくなれば、誰がこいつを散歩させるんだ」

その任務は終わってしまいました。

わんこより元気なご老人にとって、あの「メートルを歩くのに一分もかかるわんこは、反対にご老人の「心のステッキ」だったのかもしれないな、と思いました。

会話をした後、次第にお互いの距離が遠ざかるにしたがって、何故か、悲しくて、悲しくて仕方なくなりました。

それぞれの行き先が反対方向だったので、お互いの、その後の顔を見ずに済んだのは、幾分なりとも、幸いだったような気がいたします。

(完)